

Title	外国語教育における「資質・能力」からパフォーマンス課題および評価を考える：文部科学省委託事業「教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業」研究成果報告
Sub Title	Research on performance-based-assessment from the perspective of "the three competencies" in foreign language education : a report on the "Project for developing and securing professional human resources in collaboration with teacher training institutions" commissioned by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.
Author	縣, 由衣子(Agata, Yuiko)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.18, (2021.) ,p.67- 90
JaLC DOI	
Abstract	<p>This practical report presents the results of the AY-2021 Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-commissioned project, "Project for developing and securing professional human resources in collaboration with teacher training institutions (Foreign Language Education Project to Foster the Competencies Required in a Globalized Society)" which was undertaken with the Keio Research Center for Foreign Language Education. In this project, faculty members from Keio University, in collaboration with high-school teachers in Tokyo and Kanagawa Prefecture, examined how to form and implement Performance-Based-Assessment lesson plans with regard to foreign language education other than English.</p> <p>This research focuses on the new AY-2022 Course of Study for high schools, and examines how Performance-Based-Assessment was employed in foreign language education in these high schools, especially from the viewpoint of the three Competencies and the Criterion Referenced Evaluation. This year's research included development of lesson plans and teaching practices in Korean, Spanish, Chinese, German, and French. Two workshops were held for the purpose of teacher training based on the research results that have been obtained so far.</p>
Notes	調査・実践報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20210000-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

外国語教育における「資質・能力」から パフォーマンス課題および評価を考える

— 文部科学省委託事業「教員養成機関等との連携による
専門人材育成・確保事業」研究成果報告

縣 由衣子

Abstract

This practical report presents the results of the AY-2021 Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-commissioned project, “Project for developing and securing professional human resources in collaboration with teacher training institutions (Foreign Language Education Project to Foster the Competencies Required in a Globalized Society)” which was undertaken with the Keio Research Center for Foreign Language Education. In this project, faculty members from Keio University, in collaboration with high-school teachers in Tokyo and Kanagawa Prefecture, examined how to form and implement Performance-Based-Assessment lesson plans with regard to foreign language education other than English.

This research focuses on the new AY-2022 Course of Study for high schools, and examines how Performance-Based-Assessment was employed in foreign language education in these high schools, especially from the viewpoint of the three Competencies and the Criterion Referenced Evaluation. This year’s research included development of lesson plans and teaching practices in Korean, Spanish, Chinese, German, and French. Two workshops were held for the purpose of teacher training based on the research results that have been obtained so far.

1. はじめに

本報告は、令和3年度（2021）に行った文部科学省委託事業「教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業（グローバル化に対応した外国語教育推進事業）」の実施報告である。本研究プロジェクトは、前身となる同じく文部科学省委託事業である「平成29年度外国語教育強化地域拠点事業」、「平成30年度グローバル化に対応した外国語教育推進事業」、「令和

元年度グローバル化に対応した外国語教育推進事業」および、同事業の COVID-19 の流行による中止に伴い慶應義塾大学外国語教育研究センター独自事業として実施された「令和2年度グローバル化に対応した外国語教育推進事業」においてなされてきた研究と実践を引き継ぐものである¹⁾。

本年度、このプロジェクトでは、来年度から高等学校で実施される新学習指導要領において、新たに観点別学習状況評価が導入されることとも関連して、これまで行ってきた外国語教育の授業研究を評価の面により一層の重点をおいて検討し、実践を行った。また、本年度の事業が人材育成にその主眼を置くことから、事業の「受け皿」となっている慶應義塾大学外国語教育研究センターの主催で、主に高校の教員を対象としてこれまでの研究成果に基づく二回のワークショップを開催した。本報告はこのワークショップの内容を中心に、外国語教育におけるパフォーマンス課題とその評価を中心とした授業設計について研究成果の報告を行う。

2. ワークショップの開催まで

2.1 本年度の研究の概要

本プロジェクトは、慶應義塾大学の外国語教育研究センターを拠点として、上記に挙げた事業として名前を変えながら継続された研究事業で、本年度で5年目にあたる。神奈川県、東京都において、韓国・朝鮮語、スペイン語、中国語、ドイツ語、フランス語のいわゆる「英語以外の外国語」科目を有する中学校、高等学校を研究拠点校とし、そこで授業を担当する教員を、プロジェクトにおいて検討する授業を実際に実践する研究担当者としている。これらの教育拠点校の形態は、様々な機関形態における外国語授業の実施状況を考慮するため、公立（県立・都立・市立）、私立、総合学科、総合選択制、定時制などとし、また、授業の履修形態も、必修／選択、単位数も様々である。また、授業案の検討及び本年度から導入したワークショップの運営にあたり、大学の研究者、高等学校教員、教育関連団体役員を運営指導委員とした。さらに、今年度の事業が教員養成を目的とすることから、これまでの研究成果をより広く教員養成プログラムとして共有するための助言を要請するオブザーバーとして、拡大プロジェクトメンバーが加えられた。

本年度の本プロジェクトの構成員は以下である。

研究担当者

所 属	氏 名	言語（担当分野）
神奈川県立横浜翠嵐高等学校（定時制の課程）／講師	遠藤 正承	韓国・朝鮮語、地歴・公民
東京都立青梅総合高等学校／講師	石黒 みのり	韓国・朝鮮語
神奈川県立藤沢総合高等学校／教諭	佐々木 亮太	スペイン語、英語
神奈川県立藤沢総合高等学校／教諭	潮田 央	中国語、国語
横浜市立みなと総合高等学校／講師	温 悠	中国語、日本語
横浜市立みなと総合高等学校／講師	池谷 尚美	ドイツ語
埼玉県立伊奈学園総合高等学校／教諭	鈴木 冴子	ドイツ語、英語
カリタス女子中学高等学校／教諭	Barbara BAUDE	フランス語

運営指導委員

所 属	氏 名	言語（担当分野）
大学	慶應義塾大学／教授	山下 一夫 中国語 ※研究主任
	慶應義塾大学／教授	吉川 龍生 中国語
	慶應義塾大学／教授	境 一三 ドイツ語
	慶應義塾大学／助教	縣 由衣子 フランス語、英語
中学校・ 高等学校	神奈川県立平塚江南高等学校／教諭	辻 祐哉 英語
	高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク ／元代表 神奈川県立岸根高等学校／教諭	山下 誠 韓国・朝鮮語、地歴・公民
	神奈川県立深沢高等学校／教諭	日比野 規生 スペイン語、英語
教育関連団体	(公財)国際文化フォーラム／常務理事	水口 景子 外国語教育、国際交流

拡大プロジェクトメンバー

所 属	氏 名	言語（担当分野）
横浜市立みなと総合高等学校／講師	ジョン・ヨンジュ (鄭 軟姝)	韓国・朝鮮語
東京都立王子総合高等学校／講師 神奈川県立秦野総合高等学校／講師	チョン・ヒョンヒ (鄭 賢熙)	韓国・朝鮮語
秋田県立能代松陽高等学校／教諭	原田 智津子	韓国・朝鮮語、英語
東京都立第五商業高等学校／講師	リュ・ホスン (柳 虎順)	韓国・朝鮮語
カリタス女子中学高等学校／教諭	櫻木 千尋	フランス語
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科博士課程 カリタス女子中学高等学校／講師	松木 瑤子	フランス語

2.2 評価の枠組みの導入

平成27年（2009）に告示され、令和4年度（2022）に高等学校において完全実施となる新学習指導要領の改訂によって、「学習指導」だけではなく、「学習評価」が学校の教育活動の根幹として重視されることになる。その上で、「学習・指導の改善」をより効果的に行うために、「指導と評価の一体化」を目指し、「主体的・対話的で深い学び」が実現されているかを以下の三つの考え方をもとに構築することになった。

「①児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと

②教師の指導改善につながるものにしていくこと

③これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくことⁱⁱ

この方針のもとで、観点別学習状況評価はこれまでの「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」、「知識・理解」の4観点から、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」のいわゆる三つの資質・能力と関わる3観点への整理が行われた。

本プロジェクトのこれまでの研究は、この三つの資質・能力に注目し、外国語教育におけるこの資質・能力の育成を、パフォーマンス課題を中心とした授業から検討・実施してきた。そして本年度は、令和4年度からの高校での新学習指導要領の実施に伴い、この三つの資質・能力を外国語教育でどのように評価すべきか、という問題提起をもとに研究を行った。

さらに、高等学校における教科「外国語」では、専ら英語科目を念頭に定められたと思われる教科の「見方・考え方」について、英語以外の外国語においては独自に策定すべきではないかということも検討された。

これらの問題提起に基づき、次のような指導案のフォーマットが作成された。

①授業の概要

1. 学校名：

2. 科目名：

3. 単位数：

4. 担当者：

5. クラスの構成：高校 n 年生 m 名（男 r 名・女 o 名）

6. 生徒の概況：

7. 使用教科書：

② 年間指導案

1. 年間目標：

生きて働く 知識・技能の習得	未知の状況にも対応できる 思考力・判断力・表現力の育成	学びを人生や社会に生かそうとする 学びに向かう力・人間性の涵養

2. 単元構成：

月	単元名	備考

③ 単元指導案

1. 単元名

2. 単元の目標

生きて働く 知識・技能の習得	未知の状況にも対応できる 思考力・判断力・表現力の育成	学びを人生や社会に生かそうとする 学びに向かう力・人間性の涵養

3. 社会と文化への気づきのポイント

4. 他教科・他科目との連携

5. パフォーマンス課題

6. 学習指導における具体的な評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・ 表現力等	学びに向かう力・人間性	
		主体的に 学ぼうとする態度	観点別状況評価や評定には示しきれない 一人ひとりの生徒のよい点・ 可能性・進歩の状況
⇒ 観点別学習状況評価		⇒ 個人内評価	

7. 単元の指導と評価の計画

次	学習活動	具体的な評価規準	評価方法
1			
2			
3			

① 本時の指導案

1. 本時の指導と評価の計画

分	学習活動	具体的な評価規準	評価方法

2. 補足事項

このフォーマットは、前年度に作成した指導案ⁱⁱⁱを発展させたものであり、具体的には、本年度から、③単元指導案の項目6「学習指導における具体的な評価規準」以降^{iv}が加えられた。前年度までの指導案では、その主眼は「ゴール」から逆算して授業を組み立てる「逆向き設計」(バックワードデザイン)に基づき、単元目標や年間目標を設定^vすることにあった。そして、そのように設定した年間目標および単元目標を「三つの資質・能力」にブレイクダウンし、「年間の指導目標及び授業計画、単元の指導目標及び授業計画、単元におけるパフォーマンス課題という三つのレイヤー」^{vi}に連関を持たせることを目的として各研究担当者は授業案を作成し、授業を実践した^{vii}。

本年度は、これまでの指導案のフォーマットに、評価を枠組みとして導入し、年間の指導目標・授業計画と、単元の指導計画・授業計画、そしてそれらに対応した単元の評価規準・評価計画を予め定めた上で、そのような評価をすることが可能になるようにパフォーマンス課題および単元での具体的な授業内活動を設定することを目指した。新学習指導要領で実施される観点別学習状況の評価と形式を対応させたものとするすることで、各言語の評価規準が明確に設定されていない中等教育における「英語以外の外国語」の評価の基準を言語化することを試みた。それと同時に、「学びに向かう力・人間性」の項目に関しては、「観点別学習状況評価や評定に反映されない一人ひとりの生徒のよい点・可能性・進歩の状況」として、年間の学習における学習者の取り組みの姿勢や態度などについて個人内評価として定性的に捉える項目を設けた。

2021年度は、この改訂された指導案フォーマットに沿って、各研究担当者が授業案を作成し、授業実践を行った。その上で、2021年度新たに設定された評価の項目について、実際の授

業実践を経ての評価の設定の妥当性、また、評価項目に適切に対応する授業内活動の実現可能性などについて、プロジェクト内で議論が行われた。特に、新学習指導要領で新しく導入される「学びに向かう力・人間性の涵養」の点においては、小テストなどで比較的容易かつ明確に評価が可能な「知識・技能」に比して考えると評価規準の設定が難しく、また評価自体も曖昧なものになりがちであることが指摘された。さらに、個人内評価の項目については、この項目でしか捉えることのできない学習者の取り組みや姿勢が確認されるのと同時に、どのような内容を評価・評定の対象となる「観点別学習状況評価や評定に反映されない一人ひとりの生徒のよい点・可能性・進歩の状況」として設定し、「主体的に学ぼうとする態度」と区別するのかという点について更なる検討の必要性が確認された。また、この項目の評価についての学習者への伝え方に関しても授業を実施する学校の状況に応じて工夫が必要であり、一元的に形式化しうるものではないことが指摘された。

3. 第一回目ワークショップ実施報告

本年度の研究の成果をもとに、2022年の1月と2月の2回に渡り、オンライン形式でのワークショップが開催された。ワークショップの参加者は、高校教育での外国語教育（韓国・朝鮮語、スペイン語、中国語、ドイツ語、フランス語、英語）に携わる教員を中心とした。ワークショップは、「多様な外国語教育に取り組む教師向けワークショップ—来年度の授業計画を立ててみる—」と題し、2回のワークショップを通じて、本プロジェクトの研究成果である指導案に沿った外国語授業の構築を参加者に促すのと同時に、来年度から実施される新学習指導要領を外国語教育の観点から理解し、授業に反映するための意見交換を行うことを目的とした。

この目的的背景には、高等学校で「英語以外の外国語」の教育に携わる教員は、その学校で当該言語を教える唯一の教員であることが通例であり、孤立的な状況であることがしばしば指摘されていることがある。このような状況に鑑み、ワークショップでは、様々な高校の異なった語種を担当する教員間の交流を通じて、外国語授業に共通する問題点や困難を明確化することを目指した。この点において、孤立した外国語教員間では議論を通じた理解の機会が少ないと思われる新学習指導要領について、研修の機会を設け、新学習指導要領の実施に際した「英語以外の外国語」に共通する問題点の共有を行うこととした。

この目的意識をもとに、第1回目のワークショップでは、新学習指導要領の全体的な理解のため、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会委員をはじめとして、新学習指導要領の策定の中心メンバーである上智大学の奈須正裕教授を講師とする講演を設け、これをワークショップの第一部とした。さらに第二部では、まずは本プロジェクトが作成してきた指導案に基づき授業計画を作成するための最初のステップとして、年間の指導目標および授業計画と単元の指導目標及び授業計画を三つの資質・能力の点から定めたと仮定して、これらと連関を

持たせたパフォーマンス課題を単元内で実現するためには単元での具体的な授業内活動をどのようなプロセスで実施するべきか、という点についてグループワーク形式でプロジェクトメンバーおよび参加者間での議論を行った。

3.1 奈須正裕教授による講演

講演について、奈須教授の既刊著作の内容を参照しながら、著者がまとめた概要を以下に示す。文責は著者にある。

3.1.1 改めて学力とは？ 資質能力とは？

新学習指導の根幹をなす「コンピテンシー・ベース」という考え方には、日本に限らず「長年にわたり学校教育は領域固有な知識や技能、学習指導要領でいう「内容」(コンテンツ：content)の習得を最優先の課題として、コンテンツ・ベースで進められてきた」^{viii}という背景がある。コンテンツ・ベースの学力論では「学問・科学・芸術などの文化遺産から知識・技能を選りすぐり享受すること」^{ix}で子供に優れた問題解決能力を培うことができると考え、「その成果を確認することで「何を知っているのか」を問うことで事足れり」^xとしてきた。これに対しコンピテンシー・ベースの学力論は、「習得した知識・技能を自在に活用して、質の高い問題解決を成し遂げ」^{xi}、社会でよりよく生きていくことができるようになることを目指すものである。

1970年代に心理学者のマクレランドは「領域固有の知識の所有や基本的理解を問う伝統的な学力テスト、学校の成績や資格証明書の類いが、およそ職務上の業績や人生における成功を予測し得ないことを多数の事実を挙げて論証」^{xii}した。人生における成功により大きな影響力を及ぼすのは、むしろ「意欲や感情の自己調整力、肯定的な自己概念や自己信頼などの情意的な資質・能力であり、対人関係調整能力やコミュニケーション能力」^{xiii}などの能力であり、マクレランドはこうした「人生で直面する様々な問題状況に対し、質の高い問題解決を現に成し遂げるのに必要十分な能力をコンピテンスとし」^{xiv}た。

とはいえ、これらの1960年代から1970年代に提唱された心理学を中心としたコンピテンス論が今日に注目されることになった所以は、現代の社会構造が転換期を迎えていることにある。技術の進歩に伴い「要素的な知識・技能の単なる所有は陳腐化し、その価値は著しく低下」^{xv}する中、現代では、「手に入れた情報の信頼性や妥当性を正確に判断するための知識・技能であり、膨大な情報の中から自身の目的にあったものを的確に選び出し(中略)、相手に合った手法で表現をする能力」^{xvi}こそが必要とされている。また、「人工知能とロボティクスの発展は、(中略)ペスタロッツが「型にはまった仕事」(中略)と呼んだものの多くを機械化」^{xvii}していくという現状において、「人間にこそできること、人間ならではの強み」^{xviii}を考える喫緊

の必要が生じており、「どの変化もが（中略）共通に求めているのは、「どのような問題解決能力を現に成し遂げるのか」を支える資質・能力」^{xxx}なのである。

3.1.2 深い学びはつながる学び

その上で、今後求められていく「学力」「知識」のあり方は、中央教育審議会教育課程企画特別部会で、「解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解ける力を育むだけでは不十分」^{xxx}とされ、「蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことができるよう、そのために必要な資質・能力を身に付ける」^{xxi}ことが必要とされている。そのためには、「新たに獲得した知識が既存の知識と関連付けられたり組み合わせられたりしていく過程で、様々な場面で活用される体系的な概念等として身に付いていくということが重要」^{xxii}だとされる。このことを可能にするのは「深い学び」なのであるが、それは「領域固有な個別的知識と別のものとして一般的、実態的に存在する」^{xxiii}のではなくて、知識の質を変えることによって「膨大な数の領域固有知識が様々な状況や文脈と意味的、機能的に結びつき、必要に応じて自在に繰り出されるよう、高度に組織化され構造化された状態」^{xxiv}を目指すことによって実現される。この深い学びとは、知識が相互に、また自分と意味的に繋がった学びでなくてはならない。では、具体的にどのように知識は繋がられるべきなのか。

一点目としては、知識と子供自身を繋げることがある。「子供は豊かな既有知識を携えて学びの場に臨んでいる」^{xxv}のであり、その「いい線はいつているが不正確であったり断片的であったりする知識を、洗練させたり統合したりしていけるよう」^{xxvi}に学びを組み上げていくべきである。二点目は、知識を状況と繋げることであるのだが、「従来の授業では、その知識がどんな場面でも自在に使えるようにとの配慮から、むしろ一斉の文脈や状況を捨象して純化し、一般命題として教えてきた。しかし、何らの文脈も状況も伴わない知識は、（中略）子供には無機質で形式的な手続きと映」^{xxvii}ってきた。従って、「具体的な文脈や状況を豊かに含み込んだ本物の社会的実践への参画として学びをデザイン」^{xxviii}することで、学び取られた知識が現実の問題解決に生きて働く知識としていくことが必要である。三点目は教科相互に繋がった知識で、子供が「領域や場面を超えて知識を自在に活用」^{xxix}できるようになるためには、「その教科等で学ぶ膨大な領域固有知識を手際良く構造的に整理することを可能にする概念、いわばその教科の中核概念」^{xxx}が把握されることが必要である。「子供たちが中核概念を意識しながらその教科を学べるよう授業やカリキュラムを工夫することで、（中略）知識の統合化が進」^{xxxi}されることになる。

3.1.3 外国語教育が担うもの

新学習指導要領において導入される「各教科等の特質に応じた『見方・考え方』」は「その教科ならではの本质や対象への独自のアプローチの仕方について再確認するとともに、指導にあたり大切にすべきポイントの明確化」^{xxxiii}をすることを目的としたものである。そうした時、国語科と外国語科における「見方・考え方」を比較してみると、国語科では「言葉による見方・考え方」となっており、「自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること」^{xxxiii}となっている。これに対し、外国語科では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」から、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること」^{xxxiv}となっている。同じ言語に関する教科と言え、両者の特質は大きく異なっている。このことを踏まえた上で、さらにこのプロジェクトの主眼であるいわゆる第二外国語の教育が目指すべきものとは何か。一つは、国語、英語だけでなく、数学（ニューメラシー・データサイエンス）、情報（プログラミング能力・情報活用能力）と並び、学習の基盤となる資質・能力である「リテラシー」の一翼を担うことであり、もう一つは、多様な他者と協働する力を培う一翼を担うことにあるのではないか。

3.2 ハンズオンワークショップの概要

ワークショップの第二部では、本プロジェクトの研究成果である指導案のフォーマットの理解を目的としたグループワークを行った。グループワークでは、参加者は語種の異なるグループに分かれ、プロジェクトメンバーをファシリテーターとしながら、ワークシートに取り組むという形で実施された。あらかじめ設定した「三つの資質・能力に分割された年間目標および単元目標、そしてそれらと対応した本時の授業における達成目標とパフォーマンス課題」を提示し、それらと連関を持たせつつ、どのように授業内の活動を考えることができるのかをグループ内で議論を行った。その趣旨は、参加者である教員が具体的に授業で実践したことのあられる授業内活動が、三つの資質・能力にブレイクダウンして設定された単元目標のどの部分を達成するものとして関連づけることが可能であるのかを具体的に考えさせることにあった。また、このグループワークを通じて、個々の授業内の活動をどのように構築すれば、単元の最終的な課題となるパフォーマンス課題に結びつけることができるのか、というプロセスを思考することで、年間を通じてのマクロな目標から単元の目標を経て個々の授業内のミクロな活動へと連関を持たせるという指導案の理解に繋がると考えたためである。さらに、語種の異なる教員間でのグループワークを行うことによって、言語が異なっても、初学者を対象とするパフォーマンス課題を中心とした外国語授業の実践に際しては、多くの共通点があること

を実感してもらうことも期待された。

実際のグループワークは、6グループで実施され、グループワークの課題となる授業の実践例は以下に記載するワークシート①と②の2種が用意された。6グループのうち、3グループずつが共通のワークシートに取り組み、グループワーク後にグループごとでの議論の比較を行うこととした。

ワークシート①^{xxxv}

■クラスの概要と年間目標

〇〇高等学校

授業名：中国語

担当者：〇〇〇〇

クラスの概要：25人。2、3年生共修。全員が履修2年目（2単位履修済み）

生徒の学習動機：中国語に興味があるため。単位取得のため

年間目標：

中国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、中国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図り、中国語及びその背景にある文化や社会、中国語を使用する人々の考え方や価値観に関心を持ち、自他の文化や社会を理解する。

資質能力別の目標

生きて働く 知識・技能の習得	未知の状況にも対応できる 思考力・判断力・表現力の育成	学びを人生や社会に生かそうとする 学びに向かう力・人間性の涵養
中国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。	中国語でコミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、中国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

今日のグループ活動の課題：活動と単元目標の連関

■単元指導案

1. 単元名 ビデオレターで文通しよう
2. 授業回数 6次

3. 単元の目標

生きて働く 知識・技能の習得	未知の状況にも対応できる 思考力・判断力・表現力の育成	学びを人生や社会に生かそうとする 学びに向かう力・人間性の涵養
<ul style="list-style-type: none"> ・移動に関することや、目的地の地理を紹介することについて、語彙、表現、文法、言語の働きを理解する。 ・それらを聞いたり話したりする技能を身に付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き取った友人の話を踏まえて、移動の方法を提案したり、自分の考えを表現したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京・上野に行きたいと思う相手に対し、移動の方法や当地の魅力を調査し、相手に伝えるために、自分の考えを粘り強く中国語で表現しようとする。

4. パフォーマンス課題

来日する中国の大学生から送られて来たビデオレターの内容に基づき、東京・上野への行き方、所要時間、金額、一緒に食べたいもの、日本の美術品とその魅力について相手に伝える内容のビデオレターを撮影する。

授業活動

- ① 本単元の目標を理解する。
- ② 教科書の例文等を参考に、移動に関わる語彙や表現を理解する。
- ③ 移動に関する語彙や表現を使い、ペアやグループで会話する。
- ④ 友人からのビデオレター見て、内容を理解する。
- ⑤ 返答のために、必要なことを調べる。
- ⑥ 友人からの返答のために、必要なことを調べる。ビデオレターに基づき、返答をまとめる。
- ⑦ 友人へのビデオレターを撮影する。
- ⑧ 学びの内容を点検するため、ビデオレターを相互に評価したり、振り返りを通して自分の考えを見直したりする。

ワークシート②

■クラスの概要と年間目標

〇〇高等学校

授業名：ドイツ語

担当者：〇〇〇〇

クラスの概要：2単位、受講生8名（2年生6名、3年生2名、女子7名、男子1名）

生徒の学習動機：多言語学習がしたい、世界史や心理学が好き、国際交流がしたい、等

年間目標および三つの資質・能力

年間目標		
ドイツ語圏の同世代の生徒や、身近にいる同世代の生徒と交流することを想定し、ドイツ語やドイツ語圏の文化に関心を深め、相手の文化と自分の文化をお互いに紹介するような活動を通じ、自己紹介・趣味・自分の一日について話題にし、自ら発信することができる。		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
<ul style="list-style-type: none"> ドイツ語の音声、語彙、文法、言語の働き等を母語や既習言語の知識を援用しながら理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手と自分の関係や、相手の文化的な背景に配慮しつつ、コミュニケーションを円滑に進めるために、4技能のスキルを場面に応じて適切に運用することができる。 相手の考えを理解し、自分の考えを様々な手段（文字テキスト、ジェスチャー、写真、動画等）を使いながら伝えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手と積極的に関係を構築するために、自ら発信し、積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度を養う。 ドイツ語圏の文化を、他文化や自文化と比較しながら理解を深めることと同時に、自文化や固定観念についても内省することができる。

今日のグループ活動の課題：活動と単元目標の連携

■単元指導案

1. 単元名 自分的一天
2. 授業回数 10月～11月の間、10時間（2コマ続き、5回）
3. 単元の目標

生きて働く 知識・技能の習得	未知の状況にも対応できる 思考力・判断力・表現力の育成	学びを人生や社会に生かそうとする 学びに向かう力・人間性の涵養
<ul style="list-style-type: none"> 数字の表し方 時間や曜日の言い方（～時に/～曜日に～をする） 一日の流れについての言い方 	<ul style="list-style-type: none"> 自分と同年代の、様々な国の生徒たちの学校生活について想像する力。 目的に応じて必要な情報を収集し、表現する内容を判断する能力。 既習事項やビジュアルエイドを活用しながら、伝えたい事柄を工夫して構成・表現する能力。 	<ul style="list-style-type: none"> 自律的・主体的に外国語を用いて、相手に伝えようとする態度。 ドイツ語圏や、他の文化圏の学校生活について理解し、相手の文化背景を考慮しながら、情報や考えを伝えようとする態度。 目標言語の学習を通じて、積極的に周囲の人を尊重しながら関わり、相互理解を深めようとする態度。

パフォーマンス課題と授業活動

- ・ドイツ語圏の同世代の生徒や同世代の身近な生徒と交流することを想定し、自分たちの一日や一週間について話し、日本・ドイツ以外の同年代の生徒（フランスと中国を想定）の学校生活を語ろう！
- ・中国やフランスでの学校生活について、中国語学習者やフランス語学習者から情報を得て、ドイツ語で報告してみよう！

授業活動

- ① 時間の言い方と曜日の言い方を学ぶ
- ② 一日の生活についてテキストを読む
- ③ ドイツ語圏の高校の時間割を見て、日本の時間割と比べる
- ④ 一日や一週間の生活についてお互いに尋ね合う
- ⑤ 自分の一日や一週間について表現できる

グループワーク終了後にファシリテーターがグループで出た論点について発表を行った。そこで出された論点をまとめると次のようになる。

- (1) パフォーマンス課題を中核とし、ルーブリックによる評価を中心とする授業を行う場合、授業の目的や意図がどこにあり、学習すべき事項は何であり、使って良いツール（インターネット、機械翻訳や携帯電話など）が何かなど、学習者との共通理解を予め得ることが重要である。この理解は、単元や授業の冒頭だけではなく、継続的に小テストやルーブリックなどを通じて確認作業を行っていくべきである。
- (2) また、パフォーマンス課題は学習者にとってよりオーセンティシティのあるものとするべきである。つまり、パフォーマンスによるアウトプットの活動をさせることだけに注視するのではなく、その活動を学習者が実際に現実社会で使用する可能性を想定しやすなものとして文脈化し、それが実生活で役立つという実感を学習者に与えるようなものとして、設定を行う必要がある。
- (3) 授業の意図を明確化し、ルーブリックによって評価項目を学習者と共有することは重要であるが、その一方で、学習者の活動をその範囲内に限定しないようにするには注意が必要である。授業を通じて、教員の想定外の気づきを学習者が得ることをルーブリックに囚われすぎずに掬い取る視点を忘れてはならない。そのような気づきが価値あるものであり、評価の対象となることが学習者にも理解されている必要がある。
- (4) 目標として設定された三つの資質・能力との対応関係を持たせながら授業内の活動を構築することをグループワークの目的としたが、一方で、それぞれの活動は、例えば「知識・技能」の習得のみを目指したものとすることに関して疑問が呈された。「知識・技

能」の中には、その言語が使用される文化的背景の理解が不可分であるものも多くあり、そのような事項については「思考力・判断力・表現力」あるいは「学びに向かう力・人間性」との複合的な能力の習得となるはずである。というのも学習者が有する文化との相違を意識させながら、「知識・技能」として理解することが必要となるからだ。その意味で、三つの資質・能力の分割自体に教員が囚われすぎることなく、それらの学習内容の複合性に留意して活動を構築していくべきである。

4. 第二回目ワークショップ実施報告

第一回のワークショップは、学習指導要領の理念の理解および、それと対応した本プロジェクトの指導案を用いた外国語授業の構築がテーマであった。この前提の理解に基づき、第二回のワークショップではより「評価」にフォーカスし、発展的な議論を行うことを目的として実施された。その上で、重要視されたのは、本プロジェクトの今年度（2021）の研究課題でもあった、来年度からの新学習指導要領の実施に伴って導入される観点別学習状況評価である。観点別評価自体は、都道府県の教育委員会ごとに令和3年度までの実施状況が異なり、勤務する教育機関の所在によって、観点別評価自体の認識が大きく異なっている。また、外国語授業を担当する教員がその学校で当該言語を担当する唯一の教員かつ非常勤雇用であることが非常に多いことから、このような制度の変更に関してトップダウンでの理解に留まり、教員間で議論を深める機会がない、という問題が中等教育での外国語教育全体で共通する問題としてある。このような状況に鑑み、第二回のワークショップでは、観点別学習状況評価そのものの理解を目的としたレクチャー及び、外国語教育の観点からの観点別学習状況評価の捉え方、現時点で想定される論点についての本プロジェクトでの研究成果について参加者に提示を行った。それと同時に、本プロジェクトが、全国に先立ち観点別評価がすでに導入されている神奈川県を研究拠点とすることから、その実際について報告を行うこととした。第二回のワークショップでのグループワークとしては、第一回での議論を前提に、本プロジェクトの授業案の枠組みを元に評価の点から外国語授業の実践を考えると、参加者自身の授業に反映可能な点とは何か、あるいは更なる理解と研究が必要な課題とは何か、という点について、語種別グループでの議論を行った。

4.1 観点別学習状況評価およびこれまでの実践報告

4.1.1 外国語教育から見る観点別学習状況評価

本プロジェクトが作成した本年度の指導案では、指導と評価の一体化を図るため、これまで三つの資質・能力の観点から設定してきた単元の指導目標と一致した単元の評価規準の項目を設けることとした。その背景には、令和4年度からの前述したような新学習指導要領の改訂に

ともなう観点別学習状況の評価の高等教育における全面実施が主因としてある。これまでの5段階評価で行われてきた評定に加え、指導要録には、観点別学習状況を記入する欄が設置されることとなった^{xxxvi}。その上で、「各教科・科目の観点別学習状況については、高等学校学習指導要領（中略）に示す各教科・科目の目標に基づき、学校が生徒や地域実態に即して定めた当該教科・科目の目標や内容に照らして、その実現状況を観点ごとに」^{xxxvii}、3段階で評価することとなっている。この観点別学習状況評価の観点は、5段階での評定が行われる際に、「分析的な評価を行うものとして、各教科・科目の評定を行う場合において基本的な要素」^{xxxviii}となる。この評価の観点は、学習指導要領に示される目標である「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性」であるが、評価の観点においては、この「学びに向かう力・人間性」の項目が評定の対象となる「主体的に学習に取り組む態度」と「観点別学習状況評価や評定に示しきれない生徒一人一人の良い点や可能性、進歩の状況について評価するもの」を見取る項目として「個人内評価」の対象となる「感性、思いやりなど」の二つの点において評価されることとなっている^{xxxix}。前述したように、本プロジェクトでも、「学びに向かう力・人間性」の指導目標において、この「主体的に学習に取り組む態度」と個人内評価とすべき項目をどのように外国語授業の評価規準として区分するのかについては、議論の対象となったが、令和4年度の新学習指導要領の実施とともに、初等・中等教育全体での議論の課題となるべき事項であると考えられる。

4.1.2 神奈川県立藤沢総合高等学校における観点別学種状況評価の実施報告^{xi}

このような状況を踏まえ、現行の指導要領下でも神奈川県では4観点での観点別学習評価が導入されていたことから、本プロジェクトの研究拠点校の一つである神奈川県立藤沢総合高等学校の中国語授業での観点別学習評価の実施状況について報告が行われた。藤沢総合高等学校は単位制総合学科であり、セメスター制での選択講座の中に英語以外の外国語科目が設置され、「中国語」（中国語入門、中国語発展）、「スペイン語」（スペイン語入門、スペイン語発展）、「韓国語」（ハングル語入門、ハングル語発展）が履修できるようになっている。今回の対象授業は「中国語入門」を履修した生徒のみ履修可能となっている「中国語発展」である。半期科目であり、週当たりの時間数は55分×4回（2単位相当）である。

観点別学習状況評価導入前は、成績処理前に実施する試験の点数をもとに5段階での評定を行ってきた。これに対し、観点別学習状況評価の導入に伴い、まずは、年間の目標の策定が必要となった。その際、学習指導要領において、年間の授業を通じての到達目標がすでに明記されている国語などの教科及び、外国語の中でも英語と異なり、いわゆる「英語以外の外国語」科目では到達目標が定められていないために、学習者の実態に応じて年間目標は設定されることとなっている。

その上で、本年度の「中国語発展」の年間目標は次のように設定された。

<p>年間目標</p> <p>中国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、中国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図り、中国語及びその背景にある文化や社会、中国語を使用する人々の考え方や価値観に関心を持ち、自他の文化や社会を理解する。</p>		
<p>知識・技能</p> <p>中国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。</p>	<p>思考力・判断力・表現力</p> <p>中国語でコミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、中国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。</p>	<p>学びに向かう力・人間性</p> <p>外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。</p>

この年間目標に基づき、年間の指導計画が次のように設定された（1年間の指導計画となっているが、実際には、授業は Semester 制となっており、10月以前は「中国語入門」であり、10月以降が「中国語発展」の授業である）。この内、6単元目が今回の研究授業の対象となった「ビデオレターで文通しよう」である。

時期	単元名	パフォーマンス課題
① 4月、5月	中国語で挨拶して名刺交換しよう	挨拶して名前や国籍を言う（会話）
② 6月	買い物してみよう	買い物のロールプレイ（会話）
③ 7月	一日のことをまとめてみよう	自分の一日のことを用紙にまとめる
④ 8月、9月	自分のことを説明しよう	自分の名前、年齢、（家族構成）、住んでいる場所、趣味等を紹介する。（発表）
⑤ 10月	人を紹介しよう	自分の好きな有名人のことを紹介する
⑥ 11月	ビデオレターで文通しよう	日本を訪問予定の中国人の友人に東京案内のビデオレターを送る

研究授業の対象となった単元「ビデオレターで文通しよう」の単元目標は次のように設定された。

生きて働く 知識・技能の習得	未知の状況にも対応できる 思考力・判断力・表現力の育成	学びを人生や社会に生かそうとする 学びに向かう力・人間性の涵養
<ul style="list-style-type: none"> ・移動に関することや、目的地の地理を紹介することについて、語彙、表現、文法、言語の働きを理解する。 ・それらを聞いたり話したりする技能を身に付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き取った友人の話を踏まえて、移動の方法を提案したり、自分の考えを表現したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京・上野に行きたいと思う相手に対し、移動の方法や当地の魅力を調査し、相手に伝えるために、自分の考えを粘り強く中国語で表現しようとする。

この目標を達成するために、この単位では「来日する中国の大学生から送られて来たビデオレターの内容に基づき、東京・上野への行き方、所要時間、金額、一緒に食べたいもの、日本の美術品とその魅力について相手に伝える内容のビデオレターを撮影する」というパフォーマンス課題が設定された。

パフォーマンス課題の内容は、中国人大学生から送られてきたビデオの内容に回答するビデオを作成するというものであり、ビデオの形式での文通というような活動である。中国人大学生の動画は、Googleドライブで共有し、生徒がいつでも何度でも見られるようにした。初学者を対象とすることから、何も無い状態から原稿を作成することは難しいので、生徒が自分で調べたり、考えたりできる要素を残しながらワークシートで大体の内容を書けるようにした。原稿作成後、ビデオレターは生徒の持つスマートフォンでそれぞれ撮影した。時間は1分30秒程度である。撮影したビデオレターはGoogleのClassroomで提出させた。なお、提出後、お互いに動画を見合う時間を設定したが、相互評価等をする際もClassroomで配信したものを見せた。

パフォーマンス課題を含むこの単元の評価規準は、単元目標と対応させながら、指導案の形式に沿って次のように設定された。

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性	
		主体的に 学ぼうとする態度	観点別状況評価や 評定には示しきれない 一人ひとりの生徒のよい点・ 可能性・進歩の状況
⇒ 観点別学習状況評価		⇒ 個人内評価	
<ul style="list-style-type: none"> ・移動に関することや、目的地の地理を紹介することについて、語彙、表現、文法、言語の働きを理解している。 ・それらを聞いたり話したりする技能を身に付けている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き取った友人の話を踏まえて、移動の方法を提案したり、自分の考えを表現したりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京・上野に行きたいと思う相手に対し、移動の方法や当地の魅力を調査し、相手に伝えるために、自分の考えを粘り強く中国語で表現しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自律的・自覚的な外国語学習。 ・学習言語の積極的使用。 ・中国語の学習を楽しもうとする態度。

この評価規準を元に実際に各項目を評価するにあたっては、「英語以外の外国語」の学習指導要領の記述が簡略に過ぎるため、各教科の個別の評価規準の元となる中央教育審議会の「児童生徒の学習評価のあり方について（報告）」（以下「学習評価のあり方」）をもとに、評価規準を設定した。

「知識・技能」については、「学習評価のあり方」では、「具体的な評価方法としては、ペーパーテストにおいて、事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題とのバランスに配慮するなどの工夫改善を図るとともに、例えば、児童生徒が文章による説明をしたり、各教科等の内容の特質に応じて、観察・実験をしたり、式やグラフで表現したりするなど実際に知識や技能を用いる場面を設けるなど、多様な方法を適切に取り入れていくことが考えられる」^{xii}となっている。従って、「知識・技能」の項目については語彙や文法およびリスニングを含むペーパーテストの点数に基づき評価を行った。「思考力・判断力・表現力」については、「具体的な評価方法としては、ペーパーテストのみならず、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作や表現等の多様な活動を取り入れたり、それらを集めたポートフォリオを活用したりするなど評価方法を工夫することが考えられる」^{xiii}となっている。これに基づき、本授業では、パフォーマンス課題の内容について、二つの側面から評価を行った。一つは事前に提出されたパフォーマンス課題の原稿の内容、もう一つは課題発表時のルーブリックによるものであり、ここでは発音、コミュニケーションの姿勢、言語の正確さなどが項目として含まれる。このルーブリックについては、事前に生徒との共有を行った上で、評価を行った。最後に、「学びに向かう力・人間性」に関しては、「学習評価のあり方」では、「具体的な評価の方法としては、ノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察や、児童生徒による自己評価や相互評価等の状況を教師が評価を行う際に考慮する材料の一つとして用いることなどが考えられる。その際、各教科等の特質に応じて、児童生徒の発達の段階や一人一人の個性を十分に考慮しながら、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で、評価を行う必要がある」^{xiiii}となっている。また、「本観点に基づく評価としては、「主体的に学習に取り組む態度」に係る各教科等の評価の観点の趣旨に照らし、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、という二つの側面を評価することが求められる」^{xv}とされている点、特に「自らの学習を調整しようとする側面」に留意し、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を身につける過程での学習者の態度を二つの方法から評価した。一つは、「思考力・判断力・表現力」の項目で個別の事項について評価したパフォーマンス課題の全体的な評価である。二つ目は、生徒自身が自分の発表の映像に対して行うルーブリックによる自己評価及び「振り返り」の文章の適切さについてで、コミュニケーションそのものや外国語学習自体に踏み込んで

いるかどうかを重視した。

これに加え、本プロジェクトでは「観点別状況評価や評定には示しきれない一人ひとりの生徒のよい点・可能性・進歩の状況」の項目を設けたが、これについては、成績に直結する総括的評価に含めることができない。このことに関して、「学習評価のあり方」では、次のような指摘がある。『学びに向かう力・人間性』には①『主体的に学習に取り組む態度』として観点別評価（学習状況を分析的に捉える）を通じて見取ることができる部分と、②観点別評価や評定にはなじまず、こうした評価では示しきれないことから個人内評価（個人のよい点や可能性、進歩の状況について評価する）を通じて見取る部分があることに留意する必要がある⁴⁴⁾。つまり他者との比較ではなく、個人内の差異に注目し、個人内容の時系列的な変化に着目するものとして「個人内評価」があり、これはコメントや言葉がけの形で生徒に伝えることになっている。これについては、成績の対象に含めることはできないものの、授業者として授業において生徒に気づいてもらいたい、留意してもらいたい事項が示されている。

このプロジェクトにおいては、この個人内評価の欄を、「英語以外の外国語」の学習指導要領では設定されていない「各教科等の見方・考え方」を言語化するものとして位置付け、年間での外国語授業を通じて生徒に身につけて欲しいものの見方、考え方、気づきをこの項目に記入することとした。

4.2 ハンズオンワークショップの概要

これらのレクチャーおよび実践報告に基いて、参加者が語種別のグループに分かれ、本プロジェクトの研究成果および次年度から導入される観点別学習評価を中心として、それぞれの外国語授業で現状想定される困難と次年度からの自身の授業実践に導入可能と思われる事項の共有を行った。

想定される困難や問題点については、まず観点別学習状況評価に制度が転換することに生徒のみならず、保護者、そして社会全体で認識され、理解が得られている状況になることが重要であるとの指摘がなされた。また、この観点別学習状況評価の実施下でパフォーマンス課題による成績評価を授業に導入することを目指す上では、学校ごとの評定平均の縛りやテスト形式などの枠組みとの折り合いをつけなくてはならないという状況もある。さらに、パフォーマンス課題による成績評価という、ともすると主観的になりがちな方法を導入するためには、評価の明確な指標を客観的なエビデンスとして残すことが、保護者や同僚、そして生徒との信頼関係において重要であるだけでなく、教員自身が一貫した評価を行う上で非常に重要であるという意見が出た。その上で、指導と評価の一体化を図ることで逆に生徒側の混乱を生む可能性が危惧されると同時に、評価にかかる教員の負担の増大が予想されることから、サステナブルな教育を可能にする評価システムの構築の必要性が示唆された。特に個人内評価に関しては、

学習者の主体性というものが果たして評価の俎上に上げられ得るものなのか、教員が見取ることができる人数には自ずと上限があるのではないかという疑問が呈される一方で、目標や評価の項目について、生徒とのコミュニケーションと合意のもとで形成される必要があるとの意見が出た。さらに、高等学校までの教育のあり方が大きな変化することに併せて、大学の外国語教育もまた対応していくべきであるとの示唆がなされた。

その上で、参加者からは、ワークショップへの参加を通じ、まずは来年度からパフォーマンス課題自体を授業に導入したい、という意見が多く出た。さらに年間での計画性を持った一貫性のある複数のパフォーマンス課題の実施を目指したい、ルーブリックを導入したい、といった感想も出た。また、授業の計画自体に関しては、評価すべき項目をまず決めて、年間の目標については生徒との話し合いのもとで決定することで、授業の目的について生徒の理解をより深める授業計画の実践や、「振り返り」を授業計画に組み込み、授業の目的や目標を生徒が理解しているかどうかを定期的に確認するのと同時に、その理解度を授業内容に組み込む授業作りを行うことなどの提案がなされた。また学習者の限られる外国語教育において、ICT技術を用いた海外交流の機会拡大をより多く設けることを目指すだけでなく、国内の学校間での同じ言語を学ぶ学習者間での交流の機会を設けるべきであるとの意見も出された。

5. 終わりに

本年度（2021）のプロジェクトの研究成果としては、まず神奈川県・東京都下の公私立6中学校・高等学校の韓国語・スペイン語・ドイツ語・フランス語の授業において、これまでの研究を発展させた形でパフォーマンス課題の評価を取り入れた授業案の作成および授業実践を行い、また、その実践をもとに2回の教員養成ワークショップを実施したことが挙げられる。このことを通じ、新学習指導要領における三つの資質・能力の理念および観点別学習状況評価の枠組みのもとでの授業実践および評価のあり方について、指導要領の策定が不十分な「英語以外の外国語」の教科における導入に関し、その問題点を明らかにすると同時に、異なる語種間で共有可能な知見を多く得ることができた。さらに、ワークショップを通じて、プロジェクト外の外国語教員に対し、本プロジェクトの研究成果を共有するとともに、孤立しがちな外国語教員間に語種を超えたネットワーク構築および語種を超えたコミュニケーションの可能性を見出すこともできた。

他方、本年度の実践においては、観点別学習状況評価の理解とその試行的導入が研究の中心となり、「学びに向かう力・人間性」を評価する「主体的に学ぼうとする態度」と個人内評価との区別については、明確な指標を提示するには至らなかった。さらに、語種個別のものが制定されていない「教科等の見方・考え方」については、個人内評価の項目に1年間の授業を通じて学習者に至ってほしい学習者像もしくは得てほしい気づきの形で言語化し、検討を行った

が、「英語以外の外国語」全体に通底する「見方・考え方」の策定までには及ばなかった。この2点については今後の研究課題としたい。

これに加え、本実践報告では紙幅の関係上言及するに至らなかったが、プロジェクトの実践の上では、語種また科目を超えた科目間連携を行うことにより、狭い意味での言語能力を超えた、複数の言語から得られるメタ言語的能力、自文化に囚われず複数の文化を俯瞰する視点といったような、より広い意味での言語能力を涵養することが試みられた。このことは、新学指導要領の理念ともなっている「どのように社会・世界と関わりより良い人生を送るか」に外国語教育が寄与するための重要なアプローチであると考えられるが、この点については今後の検討事項とする。

参考文献

Web サイトはいずれも2022年3月12日閲覧確認

〈公文書〉

- ・ 文部科学省 2015-1「中央教育審議会教育課程部会教育課程企画特別部会「論点整理」(平成27年8月26日)
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf
- ・ 文部科学省 2015-2「初等中等教育分科会、資料1教育課程企画特別部会、論点整理 3. 学習評価の在り方について」(平成27年11月)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364317.htm
- ・ 文部科学省 2016「教育課程部会国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」(平成28年8月26日)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/sonota/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377097.pdf
- ・ 文部科学省 2019-1「中央教育審議会「児童生徒の学習評価のあり方について(報告)」(平成31年1月21日)
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2019/04/17/1415602_1_1_1.pdf
- ・ 文部科学省 2019-2「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について(通知)別紙3〔別紙3〕高等学校及び特別支援学校高等部の指導要録に記載する事項等」(平成31年3月29日)
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/attach/1415199.htm
- ・ 文部科学省 2021「初等中等教育局教育課程課「新学習指導要領の全面实施と学習評価の改善について」(令和2年10月)
https://www.mext.go.jp/content/20202012-mxt_kyoiku01-100002605_1.pdf

〈論文〉

- ・ 縣由衣子・境一三 2021 「慶應義塾大学外国語教育センター研究プロジェクト『グローバル化に対応した外国語教育推進事業』における高大協働による取り組みとその実践例」、『慶應義塾外国語教育研究』第17号, 2021年, pp.127-154.
- ・ 山下一夫・山下誠・吉川龍生 2021 「外国語教育における三つの資質・能力とパフォーマンス評価ー慶應義塾大学外国語教育センター研究プロジェクト『グローバル化に対応した外国語教育推進事業』」、『慶應義塾外国語教育研究』第17号, 2021年, pp.175-200.

〈書籍〉

- 奈須正裕 2017-1 『資質・能力と学びのメカニズム』、東洋館出版社、2017年5月。
- 奈須正裕 2017-2 『教科の本質を見据えたコンピテンシー・ベースの授業作りガイドブック』、明治図書出版、2017年11月。
- 奈須正裕 2020 『次代の学びを創る知恵とワザ』、ぎょうせい、2020年2月。
- 森住衛ほか(編) 2016 『外国語教育は英語だけでいいのか』くろしお出版、2016年。

注

- ⁱ 令和2年度の研究成果報告を中心とした本プロジェクトの経緯およびより詳しい研究成果に関しては、山下一夫・山下誠・吉川龍生 2021および縣由衣子・境一三 2021を参照のこと。
- ⁱⁱ 文部科学省 2019-1
- ⁱⁱⁱ 2021年度版の指導案に関しては、山下一夫・山下誠・吉川龍生 2021, p.185を参照のこと。
- ^{iv} ③単元指導案の項目4「他教科・他科目との連携」も本年度の指導案で初めて加えられた項目である。この項目の趣旨は、授業時間数が限定される中等教育での外国語科目において、校内の他の外国語科目、あるいは他の科目との連携を図ることにより、学習者に学習している言語に対するメタ的な視点での気づきを促し、メタ言語的な認識をより明確化することへと導くことを意図している。そして、本プロジェクトの研究拠点校の中に総合高等学校が含まれることから、こういった他言語、他教科との連携が実際に実施されたが、紙幅の関係上本稿では割愛する。
- ^v 山下一夫・山下誠・吉川龍生 2021, p.184.
- ^{vi} 縣由衣子・境一三 2021, p.128.
- ^{vii} 前年度の授業の実践例については縣由衣子・境一三 2021を参照のこと。
- ^{viii} 奈須正裕 2017-2, p.8.
- ^{ix} 奈須正裕 2017-1, p.62.
- ^x 奈須正裕 2017-1, p.62.
- ^{xi} 奈須正裕 2017-1, p.36.
- ^{xii} 奈須正裕 2017-2, p.9.
- ^{xiii} 奈須正裕 2017-2, p.9.
- ^{xiv} 奈須正裕 2017-1, p.58.

- xv 奈須正裕 2017-1, p.90.
- xvi 奈須正裕 2017-1, p.90.
- xvii 奈須正裕 2017-1, p.92.
- xviii 奈須正裕 2020, p.191.
- xix 奈須正裕 2017-1, p.93.
- xx 文部科学省 2015-1
- xxi 文部科学省 2015-1
- xxii 文部科学省 2015-1
- xxiii 奈須正裕 2020, p.158.
- xxiv 奈須正裕 2020, p.158.
- xxv 奈須正裕 2020, p.78.
- xxvi 奈須正裕 2017-2, p.19.
- xxvii 奈須正裕 2017-2, p.21.
- xxviii 奈須正裕 2017-2, p.21.
- xxix 奈須正裕 2020, p.116.
- xxx 奈須正裕 2020, p.120.
- xxxi 奈須正裕 2020, p.120.
- xxxii 奈須正裕 2020, p.101.
- xxxiii 文部科学省 2016
- xxxiv 文部科学省 2016
- xxxv 森住衛ほか(編) 2016, pp.275-281を参考に作成。
- xxxvi 文部科学省 2021
- xxxvii 文部科学省 2019-2
- xxxviii 文部科学省 2019-2
- xxxix 文部科学省 2015-2
- xl 4.1.2 に関しては、本プロジェクト研究担当者の神奈川県立藤沢総合高等学校潮田央教諭の執筆をもとに著者が加筆をした。
- xli 文部科学省 2019-1
- xlii 文部科学省 2019-1
- xliii 文部科学省 2019-1
- xliv 文部科学省 2019-1
- xliv 文部科学省 2019-1